

目次

評論・随筆・雑纂

『伝説の時代』例言	三
職業的婦人と妻	六
蓄音機の娘	三
古きギリシアの恋の歌	四
『ホトトギス』四百号	七
若い母への手紙	八
象のおはなし・二つ	三
どぶりん かちん ぱたん	四
不思議な旅	三
秋 晴——尾上始太郎先生の思ひ出——	四

娘は母になる	四
桐の花のさくころ	五
さざんか	五
椎名剛美氏後援 日本画小品頒布画会	五
茶台ずし	五
ギリシア神話の星	五
「富士太鼓」御難の記	五
成 長——ある日の日記から——	五
美はしき結晶	七
大分県立臼杵高等学校校歌	六
「美しき世界」あとがき	七
大戦の前夜	七
石田布佐子著『巴里落ちまで』序	七
日本の母親	七
『婦人公論』巻頭言拾遺)	八

デヴォルフさん	八
橋	七
エジプト旅行の回想	九
『木蔭の家』はしがき	五
婦 道	七
母 の 歌	一〇
人口疎開と学童の問題	一一
更に幅を広く	一六
〔無 題〕	一八
下掛宝生会演能解説(自然居士他)	二〇
〔木田文夫著『弱い子供の育て方』推薦文〕	二五
下懸宝生会能解説(鳥追他)	二六
素 一 へ	二九
下懸宝生会能解説(熊野他)	三二
下懸宝生会能解説(井筒他)	三四

内田さんのこと	二六
下懸宝生会能解説(百万他)	二八
下懸宝生会能解説(盛久他)	三三
〔矢崎夫人の絵画教室を開くにあたつて〕	三四
二人大名	三六
下懸宝生会能解説(清経他)	三九
下掛宝生会能解説(景清他)	四二
下掛宝生会能解説(桜川他)	四三
尊敬すべき実力	四四
〔宮沢賢治全集〕推薦文	四五
野上豊一郎著『能百句』あとがき	四五
春閑雑記	四六
故宝生新十三回忌追善能番組解説	四九
ドイツ強制収容所の体験記録	五三
齒車にもバラを	五四

目次

山荘の書棚	一七
山ろく清談	一六
新しいお客さんの鞆	一五
ハラキリと物理学者	一四
刃物は魔物	一三
奇妙な議員たち	一二
大宮人は暇あれや	一一
安保条約改定と颱風	一〇
初心を忘るべからず——世阿弥『花伝書』——	九
賢い認識を	八
北軽井沢の新先生	七
〔第三回プティ児童絵画習作展〕	六
在りし日のこと	五
『花がたみ』序	四
どんな組織にも囲い	三

新しい家庭小説	二〇〇
『成城町271番地』序	二〇一
筆者のことば	二〇五
『面影 井本静子追悼録』序	二〇六
海神丸を「人間」の題名において映画化するにあたって	二〇八
『キルケゴール全集』刊行によせて	二〇九
思ひいで	二一〇
不死鳥のような古典	二一一
再発行をよろこぶ	二二三
学ぶということ	二二四
まことの読書	二三〇
安倍さんをいたむ	二三一
黄金のメスをもつ哲学者	二三三
藤戸について	二三三
日本文化に打ちこむ独自の鍼	二三八

宮本百合子さんのこと——没後十七周年によせて——	三七
小さなホール	三二
〔無題〕	三六
空 也	三七
観世大夫の面影	三九
森の小鳥のこえ	四三
〔頌 新生 観世能楽堂〕	四三
未来の認識へ	四四
女流作家独自の仕事	四五
本統だと信じられること	四六
ギリシア劇との触れあひ	四七
日本文学への新鮮で重要な貢献	五〇
今日の悦びの日をあらたな踏み台として	五一
一粒の真珠のやうな……	五三
寧ろこれから	五五

おもいで	二五
百合子さんのこと	二五
『改訳 マルクスの娘たち』推薦文	二六〇
鈴木さんと「赤い鳥」	二六一
「南山松竹図」のことなど	二六三
片山敏彦氏への手紙(抄)	二六六
古いおもひいで	二六八
『野上彌生子全集』刊行に寄せて	二七〇
弔 辞	二七二
思ひいつるまま	二七三
いよいよ大事な存在であつた彼	二七三
大岡さんのこと	二七五
いつの世のちぎりぞや	二七七
庭前の牡丹花	二八四
昔ばなし	二九〇

『夏の花』はしがき	二九四
baum・クーヘンの話	二九七
天賦の業績	三〇三
処女作が二つある話	三〇四
世界は、その存在を保ち得るか	三〇六
思ひ出すこと	三〇八
遠くも来ぬるものかな	三二

座談・対談

野上弥生子女史に聞く 懐しい明治の文学体験

〔聞く人 小堀杏奴・中里恒子・大田洋子〕	三七
西洋と日本 〔対談 谷川徹三〕	三八
桜間弓川師を偲ぶ座談会	三七
伝統の花咲く未来を 〔対談 朝倉摂〕	三七
軽井沢清談 〔座談会 谷川徹三・大島清〕	三八

女の生き方〔対談 羽仁説子〕	四〇九
日本と日本人	四二二
野上弥生子先生のお話〔座談会 西谷啓治・大島康正・武内義範〕	四二五
ふるさとの歴史と愛〔対談 平松守彦〕	四三五
「新しき女」と女性のキリスト像〔対談 ドナルド・キーン〕	四三七
思い出すことども〔対談 谷川俊太郎〕	四三九
山荘閑談	四七〇

書簡補遺

後記	三七七
----	-----